

4 . アイルランドにおけるスポーツ

- ゲーリック・アスレティック・アソシエーションを例に -

坂 なつこ

はじめに

本稿では、アイルランドにおけるオリジナル競技の総称であるゲーリックゲームスと、それを統括するアマチュアスポーツ団体ゲーリック・アスレティック・アソシエーション (Gaelic Athletic Association 以下、GAA) を取り上げる¹⁾。

ゲーリックゲームスとは、ほぼアイルランド島でのみ行われている各種の競技である。ゲーリックフットボール (以下、フットボール)、ハーリング、ハンドボール (ラケットではなく素手でボールを打つスカッシュと似た競技) などがある。フットボールやハーリングのオールアイルランド大会では、各地方大会とゲーリックゲームス専用スタジアムであるクロークパーク (Croke Park) で行われる決勝トーナメントをあわせると、のべ約 200 万人の観客を動員する²⁾。サッカーやラグビーと並ぶ、あるいはそれ以上に人気スポーツであるといえる。

しかし、ゲーリックゲームスはアイルランドの人たちにとって、単なる「スポーツ」ではない。2005 年の年次総会において、GAA はクロークパークの「外国スポーツ」への開放を「一時的」と限定しながらも決議した³⁾。ここでいう「外国スポーツ」とは、具体的にはサッカー・ラグビーを含めた「イギリス発祥のスポーツ」であると考えてよい。サッカーやラグビーのアイルランド代表チームのホームグラウンドといえるランズダウンロード (Lansdowne Road) スタジアムは、客席数約 4 万人で、老朽化がはげしい。他方、クロークパークは 8 万人を収容する設備も近代化された巨大なスタジアムである。そのためランズダウンロードの改修をめぐり、クロークパークの「開放」 (代替使用) はアイルランド国内では長い間議論

的となっていた⁴⁾。その過程で、それを禁じた「ルール 42」が大きな障壁となっていたのであるが、幾度か否決された「開放」案は、本年とうとう可決されることとなったのである。それに際して、新聞には、アハーン (B. Ahern) 首相 (フィナフォール党)、副首相 (プログレッシブ党。現在は両党の連立政権)、フィナゲール党首 (第二党) らのコメントが載せられている⁵⁾。アハーン首相は「スポーツにとって最良の日であり、GAA において行われた民主主義的なプロセスを賞賛する」とコメントした。第二政党であるフィナゲール党リーダーの E. ケニー氏もまた、GAA の決議を強く歓迎する意を表明している。

新聞がこのようなコメントを政治家から引き出すところに、GAA が現在でも単なるスポーツ団体ではなく、その行動が政治的な意味を持つことを読み取ることができる。そしてその場合の政治とは国内問題よりも対イギリスとの関係を反映するものであり、アイルランドにおいて「スポーツ」は、その植民地としての歴史過程を投射し続けているということが出来る。後に述べるように、「ルール 42」以前に廃棄された、いくつかの「Ban (禁止令)」をめぐり歴史がそれを物語っている⁶⁾。

他方で、ゲーリックゲームスとは、強い「地元意識」に支えられている。2004 年版の年次レポートによれば、北のアルスター地方の 6 州を含めた 32 カウンティに大小 2595 クラブ (2003 年現在) を擁しているが、それぞれが下位クラブ (年齢カテゴリーごとのクラブ) を持つことを考えると膨大な数に上るといえる。GAA は、基本的小の教区 (パリッシュ) に根ざした各クラブによって成り立っている (ダブリン市の警察のクラブなど特殊なものもある)。さらにそこから選抜されたプレイヤーは、カウンティ (County) の代表と

なり、プロヴィンス(Province)大会、そしてオールアイルランドのチャンピオンシップをかけて戦うのであるが、そこには強い「地元」への帰属意識が表れている。この場合、「地元」とは自分だけではなく両親や祖父母などの出身地が含まれる。ここでは「ナショナル」は「国家」としてではなく、「自分の生まれた土地」として表れるのである。

GAA とはそのローカルからナショナルへの道筋をつなぐ大きな媒介といえるのではないだろうか。近年グローバル化との関係からローカルな場におけるスポーツの重要性が取り上げられている。しかしその際、システム化を促すグローバル化の諸力にも、排他的なナショナリズムにも収奪されない、「場につながる身体性」が重要になってくる⁷⁾。ゲーリックゲームスを通して示される人々のアイデンティティには、そのようなローカルズムについて考える端緒が得られるのではないかと思われるのである。

1. アイルランドの歴史と GAA の創設

GAA は 1884 年 11 月 1 日、ティパレリー州 (County Tipperary) のタールズ (Thurles) にあるホテルのピリヤードルームで誕生した。GAA が特定の政治団体を支持することはなかったといわれるにもかかわらず、スウェニー (E.Sweeney) が、「GAA はその始まりからナショナリストの組織であった」と記している⁸⁾。設立を呼びかけたキューザック (M.Cusack) は、アイルランドの伝統的な娯楽 pastime を守るための全国的な組織の設立を呼びかけたことに始まるのだが、彼は Irish National Brotherhood (以下 IRB) の一員であり、その呼びかけは明確に生活の「非イギリス化」を唱えるものであった⁹⁾。

アイルランドとイギリスの歴史を概観するといくつかの大きな出来事がある。アイルランドは、1789 年のウルフ・トーンの蜂起を鎮圧され、1800 年の併合法により「正式」にイギリス帝国の植民地になった。しかし、その両者の関係は、長く複

雑なものであり、とりわけ 1649 年クロムウェル軍の侵攻、1690 年のボイン川の戦闘、1695 年のカトリック処罰法の一連の歴史は、北アイルランド問題は宗教問題に収斂できるものではないが、それへと続くともいえるカトリックとプロテスタントとの凄惨な道筋を示すものである¹⁰⁾。1922 年にアイルランド自由国として独立に至るまでの (1949 年、共和国となり英連邦から離脱)、19 世紀の後半から 1916 年のイースター蜂起をへた独立運動の期間は、アイリッシュナショナリズムの変動の大きな流れの中にある。アイリッシュナショナリズムは、決して一枚岩的な動きではなかったことはさまざまに語られるところであり、「自治」と「独立」のどちらを目指すべきかでもさまざまな論争がなされている¹¹⁾。そのなかでも、1848 年の青年アイルランド党の蜂起は失敗に終わったものの、IRB はその後の IRA (Irish Republican Army) の原点ともいえる組織でもあり、独立戦争でも多くが義勇軍として加わり重要な役割を果たしたとされる¹²⁾。

アイルランドナショナリズムが一枚岩になれなかった大きな理由の一つには、さらに、アイルランドの伝統的的地方分権制があげられる。松尾は、農村における独立戦争の様相を詳細に研究しているが、その「地域割拠性」を捉え、農村地域の独立性、農民相互の連帯と大衆との新たな連帯の可能性を見いだしつつも、結局は伝統主義的な閉鎖的人間関係と利益誘導的政治が残ったことに対し、「マルクスの『協働』に裏打ちされた民族的連帯」がアイルランドにおいては欠如していたとし、独立後の経済的混乱を助長した面もあると、厳しい批判を向けている¹³⁾。

キューザックが IRB の一員であったこと、さらにその後の GAA と IRB との関係からは、GAA がナショナリズムの潮流のなかにあることは明らかである。しかしそれは明示的なものではなかった。むしろ、政治的な多様性を「文化」という側面からゆるやかに統合した点に、GAA の「成功」の特徴があるといえるのである¹⁴⁾。

だが、GAA だけが唯一のそのような文化団体で

あったわけではない。むしろ、アイルランド研究においては、ゲーリック・リヴァイヴァルと呼ばれるアイルランド語の復興と文学を中心とした文芸復興運動が大きな位置を占めている。1891年に国民党を率いて議会を通じて自治獲得運動を推進したパーネル(C.S.Parnell)の死去から、1916年のイースター蜂起(実際には、その失敗とイギリス政府による首謀者らへの処刑がその後の独立戦争への引き金ともなるのだが)に至る20年あまりは、政治的には空白期といわれている。小田は、ピアース(P.Pearse: イースター蜂起の首謀者)の言葉を引用し、その期に起こったゲーリック・リヴァイヴァル運動が、「その政治的空白を埋め、アイルランドナショナリズムの衰退を防ぎ、ひいては文化的手段を用いてアイルランド人の中に愛国心を養うことで、ナショナリズムをむしろ発展させた」と理解されるとする¹⁵⁾。

そのように「文化」が積極的にナショナリズム運動の過程で語られたことが、アイルランドの独立運動には特徴的であるといえることができるだろう。しかしながら、その最大の「文化的ナショナリズムの復興」ともいえるアイルランド語の復活は、厳しい現実さらされた。ブラウンは、独立当時教育制度の適切な改革の実行が可能であったなら、その復興も現実のものとなつたのではないかと思われるほどアイルランド語の復活は熱心に語られるものの一つであったとし、「何十年もの間、アイルランド語の衰退のような問題がもっとも頻りに議論されたのは文化と国民性の観点からであり、アイルランド語を日常語とする地域から四十年にわたってたれ流された移民の出血を許したような経済秩序に対処しようとする真剣な努力は払われなかった」と、経済的、政治的対策の失敗を述べている¹⁶⁾。

アイルランド語の復興を目指したゲーリックリーグ(1893年創設)の活動とその後の言語の状況をGAAの「成功」と比較することは興味深い¹⁷⁾。マッケルウェインは、国勢調査などの資料から、自国語の保存に対する強い支持や教育制度の改革から言語能力が着実に進歩している一方で、アイ

ルランド語が第一に「学校の科目」としてあり、家庭や日常の言語として話されている地域と使用率は、相変わらず減少傾向にあり、存続には深刻な影響が見られることを指摘している¹⁸⁾。

堀越は、ゲーリックリーグはその成果を十分に上げたとはいえないとしても、アイルランド自身に対する人々の関心を喚起したとし、それについてはGAAの寄与は大きかったと述べている。ハッチソンは、GAAはアイルランドの「田舎の生活」を再生しただけではなく、最も重要で影響が大きかったことは、挑発的な分離主義者(separatist)に民主的な文化を与えたことであり、好戦的なナショナリストにはマンパワーの蓄えを提供したことであったとしている¹⁹⁾。

GAAはゲーリックゲームスというアイルランドの「伝統」的娯楽の「復活」によって、言語的復興(アイルランド語の復活)の困難性を、引き受けることができたといえるだろう²⁰⁾。

M.クローニン(19世紀末に興った文芸復興運動にはじまる一連の文化運動のなかでも、GAAの「草の根」性を指摘する。そこでは「文芸」が対象とする「高学歴」な人々だけではなく、下層の人々を含めた広範な階級の人々がコミットできたとするのである²¹⁾。そのような表現が多少大げさなものだとしても、A.D.スミスが述べるように、文化や共通の言語が可能にするのは「共通の考えや感情」であり、そのような情動的な結びつきをとおして「諸文化からなる家族」を再発見することになるとすると、政治的独立や文学の世界では成し遂げられないアイリッシュナショナリズムの「統一」を、GAAは遂行することができたといえるだろう²²⁾。

クローニンは、GAAの特徴を「その狭小なparochialナショナリズムの非常な特殊性は、『私たちのゲームである』と、世界に向かって宣言できるということである」、すなわち、GAAが当時可能としたのは、イギリスに対する自己定義の必要性、19世末のアイルランドナショナリズムの形式の表象であり、「West Briton(西のイギリス人)」とは異なるということであった²³⁾。そのように

GAA は当初から、独立運動のなかに位置づけられる。海老島は、J.サグデン(Sugden) / A.ベアナー Biarner が、キューザックの GAA における影響について、その原動力は大きかったものの、英国化する生活に対する抵抗者という GAA のナショナル運動のイメージは作られていったものであるとしていることを指摘している²⁴⁾。確かにそのようなイメージは作られていったものであるということが出来る。そのイメージは「アイリッシュネス」の獲得という意味からも「反イギリス」という色を付ける必要があったのである。

しかし、他のアイルランド文化と同様、スポーツにおいても「非イギリス的なもの」を区別することは簡単ではない²⁵⁾。ベアナーは、地理的近接性からも、スポーツをめぐる他の植民地との大きな違いのひとつをエリート層の重なりに見いだしている。地理的な近接性と、上層階級におけるその家族的、個人的関係の近接性によって、いっそう英国エリートと地元エリートの差異が曖昧である。教育制度の相似または同じ大学やパブリックスクールの出身などであり、彼らは英国のゲーム(スポーツ)に共通の基盤を有しているからである²⁶⁾。

他方で、GAA の設立にあたって、キューザックらが「イギリス的」とするのは当時人気のあった様々なフィールドスポーツを指していた。パトロンの一人、クローク大司教は「民衆娯楽の衰退」を嘆き、次のように述べている。

「私たちは日々イングランドからさまざまな工業製品を輸入している。(・・・)しかし、それだけではなく、私たちは帝国のやり方、アクセント、悪しき文学、音楽、ダンス、そして多種多様なマナーリズム、ゲーム、そして娯楽を、私が信じているように、私たち自身の壮大な自国のスポーツ(grand national sports)へ、また私たちの古い土地のすべての純粋な息子や娘たちの痛々しい屈辱へと、輸入しているのである。ボール遊び、ハーリング、フットボール・キッキング、アイルランドのルールに従った、さまざまな種類の投げること(casting)、跳躍(leaping)や、レスリング、

ハンディグリップ(handy-grips)、トップペギング(top-pegging)、馬跳び(leap-frog)、ラウンダーズ(rounders)、ティップインザハット(tip-in-the-hat)など男性や男の子たちに人気のエクササイズやアミューズメントは、単に葬られただけでなく、いくつかの場所では完全に忘れ去られてしまったということが出来るでしょう。」²⁷⁾

しかし、クローク大司教は、同時に、イギリスのスポーツを単に糾弾しているわけではなく、「健康的なエクササイズ」として、クロケー、クリケット、ローンテニス、ポロなどのフィールドスポーツを賞賛する言葉を記してもいるのである。GAA のホームページでは、キューザックがイギリスのアスレティック・アソシエーションを憧憬していたと述べられている。キューザックは、自身が熱心なアスリートであり教師であった。スポーツの持つ教育的側面や道徳的側面を評価していたともいえる。その側面は、キューザックが GAA の名称に、「Games / Pastime」といった言葉ではなく、「アスレティック」を選んでいることから伺える。サグデン / ベアナーは、キューザックがクリケットやラグビーを含むスポーツに参加し、それらの組織化されたスポーツの価値、すなわち、フェアプレーの精神やアマチュアリズム、身体的なフィットネスやスポーツの競争による教育の側面の価値を強く信じていたとしている²⁸⁾。

他方で、そのような、「近代的身体」を目指すような性質は、IRB の愛国心と「軍事訓練」のための身体への要求を満たすものであり、主導権を巡る争いへと導かれていくといえる。

また、1924、1928、1932 年には古代ケルトの競技大会「Tailteann Games」を、アイルランド自由国の政府の支援で復活させており、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニューファンドランド、ニュージーランド、南アフリカから選手が参加し、「国際大会」を開催させている。Tailteann Games については、1924 年のコミッションナーにはノーベル賞詩人 J.B. イェイツ(Yeats)なども含み、当時のナショナリズムとの関連からも興味深い²⁹⁾。

このように GAA は、現在人気のあるフットボールやハーリングなどの個別の競技の復活ではなく、より広い「ゲーリック文化」を目指していたともいえる³⁰⁾。フットボールやハーリングというより競争的な競技が残ったところには、イギリス・スポーツが残した近代のコード化を読み取ることができ、ここで表象される「アイリッシュネス」とは何かということは再考されなければならない。他方で、次に述べるアイルランドのローカリズムにより、それはガットマンがグルーペを引用して述べるような、「『共同体(コムタス)』というものを表現する、ありうべき機会を提供するもの」への可能性を見いだすことができると考える³¹⁾。

2. ナショナルなもの - 「土地の感覚」

R.キレーンが、アイルランドにおいては「民族についての感覚は強いが、国家についての感覚は - 支援や福祉施与者としての国家をのぞけば - 弱かった」³²⁾とするのは、理由のあることである。アイルランドは長い間中央集権的な強力な国家を持つことができなかつたために、地方分権的なコミュニティ単位の帰属意識が強く残ったといえるかもしれない。他方で、アイルランド人にとって、「国家」とは常に「英国」のことであり、そこには「帰属意識」を生じさせる要因はほとんどなかった。「国家」とは常に、「支配者」であったために、アイルランド人がアイデンティティを持ちうるのは、自らが生まれた土地であり、教会区(パリッシュ)であったといえる。海老島は、このようなアイルランド人のアイデンティティの様相を、N.エリアスの「残存単位(サバイバル・ユニット)」の概念を用いて論じている。そこでは、近代の国民国家社会においては「国家」に結びつくような「われわれ意識」が、アイルランドにおいては「パリッシュ」における「われわれ意識」がそれ以上の高位のレベルへと結びつく可能性がほとんどなかったとするのである³³⁾。そこには、「閉鎖性」や「非流動性」とも解釈される地域社会

への深いコミットが見られる³⁴⁾。

このような側面を、竹下は、アイルランド音楽のなかで人々がよく言及する「デューハス dúchas」という言葉を取りあげ、アイルランド人のアイデンティティについて分析している³⁵⁾。「デューハス dúchas」は、「生まれつきの音楽の才能に恵まれている」といった表現で用いられるという。アイルランドの伝統音楽は、それぞれの地域に独特のものであり、音譜を持たない。そのため、歌や楽器の演奏などは口承や見よう見まねで伝承されてきた³⁶⁾。そこでは音楽とともに、「伝説(レジェンド)」といわれる多くの「名人」が語り継がれてきたのである。そのような卓越した腕の持ち主を「天性は訓練よりも強し」ということわざによって賞賛することにより、学習可能性に消極的な考えを示す人も少なくないという。そのような考えは多くの社会にみられるとするが、アイルランドにおいては「デューハス dúchas」が一つのエートスとなり、アイルランド音楽には欠かせないものであるとする。竹下は、「デューハス dúchas」がアイルランド社会の閉鎖性を示す一方で、語義的に「遺伝」「野生」といった意味を持ち、さらに「親類関係」や「世襲関係」「(具体的な意味での)土地、領土」「その土地独特の(を意味する限定詞)」などとも使われることから、そこに独特の考えを読み取っている。それは、「過去と未来が現在の中に生きているという『一次元的時間性』」であり、また、「それぞれの共同体は、歴史に規定されたという意味ではそれを限界として容認しつつも、固有のありようを追求しながら、民族全体としてはゆるやかにつながっていくような」あり方としての「地方分権的空間性」であるとしている³⁷⁾。つまり、そこには「人々が毎日生活している基盤である、血縁、家庭、土地、地域を大切にした考え方が示されている。つまり、ここには、人間や世界に対する態度や価値観を何が何でも一つに斉一化したり統一したりしようとする全体主義的な傾向は存在せず、それぞれが自らの継承された生活空間に誇りを持ち、共同体の凝集性を堅持しながら生きていこうとす

る、地域を重視する世界観が見られる」のである³⁸⁾。

ノーベル文学賞詩人 S.ヒーニーの言葉を借りれば「土地の感覚」というものであり、アイルランド語の土地名とリンクした感覚は、地名の英語化によって多くが失われているとする³⁹⁾。そこに述べられているのは、単純なアイルランド語（文化）回帰ではなく、土地に関わるより研ぎ澄まされた身体感覚であると考えられる。「私たちの想像力は地名に刺激されて反応します。その刺激によって土地の感覚が鋭くなり、人間というイキモノが単に地図上の国ばかりではなく精神の国の住人でもあるという感覚も強まってくる。土地に対する感覚を可能な限り豊かに養うものこそ、地図の国と精神の国同士の平等な婚姻なのです」。ヒーニーは、ダンテを例に、詩における土地へのこだわりはアイルランドに個別特有なものではないが、その「土地」を巡る歴史がその感覚を先鋭化させてきたとも記す。ヒーニーは、アイルランド詩人 P. カヴァナを論じながら、「モナハンの片田舎に対する忠誠心に基づいてカヴァナが土地を巡る本物の発言をしたその行為が、土地での生活体験を自己形成にあずかる最たるものと感じているはずの大多数のアイルランド人に対し自画像の血米を提供する」ことに通じたのではないかとしている。さらにそのような感覚を、アイルランドの「風光明媚」を「帰属」意識と結びつけたもう一人の詩人モンタギューと比較し、カヴァナの土地感覚が、逆説的に聞こえるが「離脱」であるとする。カヴァナは「『われわれ』よりも『私』を好むのです」。共同体に帰属（アタッチ）するのではなくそこから離脱（ディタッチ）するとしている。ヒーニーはどちらも「土地に対する感覚」が二人の足場を確かなものにしていながらも、政治的文化的ナショナリズムという抽象概念から離脱するカヴァナにより近づいているように思われる。カヴァナは、抽象概念としての共同体ではなく、「教区的（パロキアル）」とヒーニーが表現する「土地」に根を下ろしているからである。

GAA は、歴史的起源としてだけでなく、現在も

「分断されている」アイルランド人に、「伝統スポーツ」を「提供」することで、「アイリッシュネス」を表象し続けてきたといえよう。しかし、そこに示される「アイリッシュネス」とは、単なる「統一的な国家」に吸収された国民というアイデンティティではなく、あくまでも地域共同体に根ざしているということが重要であると思われる。そこにはヒーニーや「デューハス dúchas」に示される、「土地」に根を下ろした歴史観と空間意識をとらえることができる。

オリンピックなどのような世界的競技大会において勝つことが「アイリッシュネス」を示すのではなく、また、「奴らのゲームで奴らを倒す」のではなく、「ゲーリックスポーツ」をすること、それを見ること（理解すること、歴史や「伝説（レジェンド）」と呼ばれる名選手や名試合を語れること）が「アイリッシュネス」の表象となるのである⁴⁰⁾。

クローニン、サッカーは「イングランドがサッカーの母国だ」ということは、単に歴史的な「起源」ではあっても、現代においてサッカーが「イングランドのものである」ということはいえないとする。しかし、フットボールやハーリングといったゲーリックゲームスは、アイルランド人にとって「this is us, this is our game」ということが出来るものであるとするのだ。このことが、GAA がインターナショナルゲーム（インターナショナルな普及）ではないにもかかわらず、ナショナリズムの表象となることが成り得た一つの理由であるとする⁴¹⁾。

3. ゲーリックゲームス？

アイリッシュ・インディペンデント紙によれば、この十年間で GAA の収入は 5 倍以上になっている。アマチュアスポーツが衰退しているといわれている中で、そのようなスポーツは世界にも例を見ないだろう。だが GAA は、歴史過程において果たしてきた、また自身が目指してきた役割とは裏腹に、近代スポーツの要素を積極的に取り入れ

ることによって、国民スポーツとしての地位を拡大してきたといえる。

GAA は積極的にメディアによる(ラジオ、テレビ)配信を行ってきたし、1996年に設立されたアイルランド語の放送局である TG4 を中心としたメディアスポーツとしての展開は、スペクテイタースポーツとしての性格を確固たるものとした。メディアの活用は、カウンティ同士の対抗性をより活発なものとし、都市部から離れた僻村においても人々が「アイルランドのチャンピオン」への興味を持ちうるようになりえた。また、それによりゲーリックゲームスを共有するという感覚も生じ、より「アイリッシュネス」を体現することができるようになったともいえる⁴²⁾。

さらに、アマチュアスポーツであることは、GAA の最大の特徴ともいえるが、1990年代に入ってから、スポンサーシップを採用し、資金的な安定をより確固たるものとしてきている。そこには、ビールで有名なギネス社などの「地元」スポンサーだけではなく、「TOYOTA」「FUJI FILM」など「外国」のスポンサーも多数見られる⁴³⁾。ジャージーに配置されるスポンサーロゴもまた、90年代に入ってから取り入れられたものであり、日本ではJリーグが設立当初(1993年)そのローカリティを強調するため商業的ロゴを禁止し、チーム名から除いたのとは反対の立場であることは興味深い⁴⁴⁾。

さらに、チームに関連するさまざまなグッズは市場となっている。ジャージーや、マフラー、フラッグなど、売られているグッズの種類は、プレミアリーグなどサッカーや他のスポーツとほぼ同様である。しかし、興味深いことには、GAA はプレイヤーが身につけるジャージーなどはアイルランド製でなければならないと定めていることである。

また、専用競技場であるクロークパークのラグビー・サッカーへの開放は「限定的」でも決定されたが、すでに2003年スペシャルオリンピックの開会式・閉会式や、有名歌手のコンサート、各種のイベントが積極的に誘致されており、ゲーリ

ックゲームスに限定されない活用が行われている⁴⁵⁾。

ゲーリックゲームスは、クローニンの指摘にもかかわらず、すでに「グローバルゼーション」の渦中にある。GAA が「外国スポーツ」を、「排除」する立場をとり続けてきたとしても、そのエートスや手法ははからずも GAA の原動力となっているといえるのである。サッカーやラグビーがメディアスポーツとして、あるいは魅力的な「プロスポーツ」として、近年の GAA の競技人口の減少に影響しているといわれる中で、競争的に観客やプレイヤーを獲得していくことができるのか⁴⁶⁾。あるいは、また生活習慣、食生活の変化を受け、スポーツカウンスルとの協同により生涯スポーツ(Lifelong Sport)としてのあり方が示されているが、そのような展開が人気の減少に歯止めをかけることにつながるのかどうか、GAA の性格がスポーツや社会のグローバルゼーションとの関連で、どのように変化していくのか、より多角的な研究が必要であろう。

おわりに

「ケルティックタイガー」と称されるアイルランドの急激な経済発展を背景に、社会システムやコミュニティも変化を余儀なくされている⁴⁷⁾。アイルランドが国として経験している、もっとも大きな変化は、人口の増加であろう。労使協調路線と外国企業の誘致、法人税の緩和、EU からの援助などを背景とした経済成長は、1840年代の「大飢饉」以来、国外へと職を求めて流出し続けたアイルランド国民を国内にとどまらせ、逆に外から仕事を求めて流入する移民を増やし続けている。2004年には、飢饉後初めて人口が増加に転じている⁴⁸⁾。これにより、アイルランド国内には、新たな問題として様々な人種、民族問題が生じつつある。すなわち急激な経済成長により、国内の貧富の格差が広がり、低所得者層における社会的不満の高まりや、安い賃金で働く外国人労働者への差別や不満が生じつつあるといえる。また、アイル

ランドのコミュニティの凝集性を強く（良くも悪くも）支えてきたカソリック教会の影響力も、聖職者の不祥事も背景に、衰えをみせている⁴⁹⁾。

国内に生じつつある「差異」と、EUの一員としての自覚は、アイデンティティにどのような変化を迫るものであろうか⁵⁰⁾。近年、アイルランド社会学においてもそのようなアイデンティティの変容を捉えた様々な研究があらわれている。IRAの武装解除が本格化をみせるなかで、北アイルランド問題のさらなる和平化など、ナショナリズムをめぐる新しい局面は、今後の文化、スポーツにどのような変化を生じさせるであろうか。より多面的な研究が必要であろう。



(フェースペインティング)



(グッズ売り)

「2004年9月筆者撮影」

1) ここでの「アイルランド」は、アイルランド島全土を指す。他方、国家としてはアルスター州6カウンティが北アイルランドとしてイギリス連邦に所属する。本稿ではアイルランドあるいは「南」と記すときにはアイルランド共和国を、また「北」とするときには北アイルランドを指す。地理的に言及する必要があるときには、アイルランド島と記している。「アイルランド人」とは北も含めたアイルランド島の住民を指している。移民も含め「民族」としてのアイルランド人を指す場合もある。

2) 女子のフットボール、カモギー（ハーリング）ハンドボールは組織的には別の団体となっている。競技の特徴：【フットボール】グラウンドは横が約137m、縦約82m。ゴールはラグビーで使われるものと同じだが、真ん中のバーはラグビーのものよりも低く、サッカーのゴールよりは高く設定してある。さらに、バーの下にはサッカーと同じくネットが張られ、ゴールの真ん中のバーより上にボールを蹴るもしくは手で突いたら1点(ポイント)、バーの下、ゴールネットの中であれば3点となる(ゴール)。得点表示は「2-14」のように先にゴールの数を、後ろにポイント数を示す。ゲリックフットボールで使われるボールはサッカーボールより小さいく、ボールを持った状態で4歩進むことが可能で、その後、蹴ったり、手で突いて「ハンドパス」することができ、4歩進むごとに地面にバウンス(ドリブル)するか、ボールを足の上に落として手元まで蹴り上げる「ソロ」を行う。バウンスを2回続けることはできない。日本ゲリックフットボールクラブのホームページを参考に日本語を一部変更した。

<http://www.japangaa.com/>

【ハーリング】ハーラーと呼ばれるスティックでスリーター(sliotar：豚の皮でできた野球のボール大)と呼ばれるボールを奪い合う競技。グラウンドの大きさ、ゴールの作り、得点の換算はフットボールと同じ。競技は、ハーラーでボールを打つか、ハーラーの側面でスリーターを運ぶことができる。空中でキャッチすることはできるが、地面に落ちているスリーターは手で拾うことはできない。

3) Irish Independent, 16 April 2005、インターネット版。

4) 新スタジアムの建設計画は資金難もあり実現していない。政府は「ひも付き」ではないとしながらも、クロークパークの改修費用を提供している。また「ラグビーやサッカーの“ホームゲーム”をブリテン島のスタジアムを借りて行ってもよいのか」といった世論もあり、8割以上のアイルランド人が、GAAのメンバーも含め、「開放」を望んでいるという新聞アンケートもあった。Irish Independent March 15 2005、インターネット版。

5) Irish Independent 16 April 2005、インターネット版。

6) The GAA, National Library of Ireland, 1984, p.20. たとえば、北アイルランドにおける保安部隊、イギリス警察のGAAへの参加を禁止した「ルール21」も、2001年になってようやく廃止されている。1920年11月21日、イギリス軍はクロークパークでのティパレイリーとダブリンのゲーム中を襲い、選手・観客を含む13人の死者と数百人のけが人を出した。「血の日曜日事件」。また、「トラブル(北アイルランド問題)」とGAAの関係については、Des Fahy, How the GAA Survived the Troubles, Merlin Publishing, 2001. また、ラグビーやクリケットの国際試合では「南北合同チーム」が結成され、サッカーにおいては北と南がそれぞれ代表チームを持つ。そのため、Bairnerは、GAAやスポーツに表象されるナショナリズムは単純ではなく、北と南でも大きく異なり、複雑な様相をみせる

ことを指摘している。A. Bairner, *Sport, Nationalism and Globalization*, Sunny, 2001.

7) 拙稿「文明化論再考 - グローバリゼーションにおけるエリアスとスポーツ」『一橋大学スポーツ研究』No.24、2004年、参照。その観点から、近年のサッカーサポーターを中心とした諸活動について考察したものについて、拙稿「スポーツと新しい社会運動の可能性 - 新潟 Alliance2002 を例に」『一橋大学スポーツ科学研究室年報』2003年など参照。

8) E. Sweeney, *Pocket History of Gaelic Sports*, O'Brien, 2004, p.8.

9) ここでの「イギリス」は英帝国を指し、より正確にはイングランドを指している。

10) R. キレーン『図説アイルランドの歴史』彩流社、2000年。「クロムウェルの通った後には草も生えない」といわれるほどの蛮行について訳者の鈴木良平氏は、彼ほどアイルランドで憎まれている人間はいないと述べている。87頁。他方で「アイルランドの西には囚人をつるす樹木すらない」とクロムウェルが言ったとする逸話もよく聞かれる話である。いずれにせよ、アイルランド人にとってのクロムウェルの評価がよく分かる話である。これはまた現代でもアイルランド人のイギリス帝国へのメンタリティをあらわすエピソードとしてよく用いられる。

11) 堀越智『アイルランドナショナリズムの諸相 - 98年蜂起から16年蜂起まで』『アイルランドナショナリズムの歴史的研究』論創社1981年。竹本洋「アイルランドの『反乱』と思想家たち - アイルランド問題から環アイルランド海 = 環太平洋問題へ」『一橋大学社会科学古典資料センター』シリーズ8号、1985年。1970年代におこったアイルランド史における修正主義論争については、勝田俊輔「アイルランド歴史学における最近の動向 - 修正主義をめぐる議論について」『エール』第15号、1995年。

12) 1848年の蜂起については『大英帝国のなかの「反乱」 - アイルランドのフィニアンたち(第二版)』高神信一、同文館出版、2005年に詳細な研究がある。フィニアンとはアイルランド語の「戦士」に由来する愛称。堀越智『アイルランド独立戦争1919 - 21』論創社、1985年)

13) 松尾「地域社会から見たアイルランド独立戦争 - 1919 ~ 21年」『アイルランドナショナリズムの歴史的研究』188頁。

14) J. Hutchinson, *The Dynamics of Cultural Nationalism*, Unwin Hyman Ltd, 1987. また、T. イーグルトンは、グラムシのヘゲモニー論を用いて、アイルランドにおいて最終的にはイギリス帝国がヘゲモニーを獲得できなかったと論じている。『表象のアイルランド』紀伊國屋書店、1997年。この点は、今後アイルランドにおける権力のあり方を考える上で示唆的であると考えられる。

15) 小田順子「アイルランドにおけるゲーリック・リヴァイヴァルの諸相」『ケルト復興』中央大学人文科学研究所編、中央大学出版部、2001年、59頁。

16) T. ブラウン『アイルランド 社会と文化 1922-85』国文社、2000年、118頁。だが、アイルランド語復活についても、それは一枚岩ではなかった。「アイルランド語復興のゆくえ - 言語なしでのアイデンティティの模索」袴田千夏『エール』21号、2001年。

17) Hutchinson は、ゲーリックリーグと並び、GAA を成功した組織に位置づけている。p.118.の表参照。ブラウン、同上書。GAA の歴代プレジデント、事務総長らにはゲーリックリーグのメンバーや言語運動のサポ-

ーターなどを多く含んでいる。GAA のホームページより。
<http://www.gaa.ie/>)

18) 「アイルランド語 - 歴史および現状」『ケルト 伝統と民俗の想像力』中央大学出版部、1991年、386頁。他方で、たとえば、アイリッシュダンスの流行にも触発され、アイルランド文化復興への様々な盛り上がりは、アイルランド人にとっても再度の「ゲーリック・リバイバル」を生じさせている側面もみせている。山下理恵子、山本拓司「アイリッシュ・ダンスの社会学 - 歴史的展開に関する序論的考察 - 」『エール』(23) [2003.12] 66頁。

19) 堀越「アイルランド・ナショナリズムの諸相」、206頁。しかし、ハッチソンはまた、GAA の英国の軍人やプロテスタント(かつてハーリングをプレイしていた)への排他的戦略は、結局はアイルランドにおける都市カソリックたちを、いっそうラグビーやサッカーへと向けさせたとする。Hutchison, p.161.

20) 文学や言語による統一は、階級や教育制度により困難を示した。テレンスは、55頁に「独立語の教育制度「国は帝国主義統治機構から残された教育構造をほぼそっくりそのまま維持することで満足していたからである。中等教育は階級意識が濃厚で、宗教色の強い運営がなされ、職業教育はより学術的な期間よりも社会的に劣ったものとされてきたし、大学は富裕層と専門職家族からの学生でほぼ独占された保護区だった。変化があったのは、中央官僚による教育制度が強化されたことだった。」

21) M. Cronin, *Sport and Nationalism in Ireland*, Four Courts Press, 1999, p.17.

22) A.D. スミス『ナショナリズムの生命力』晶文社、1998年、291頁。

23) クローニンも、同様に「グローバリゼーション」スポーツとは、異なるということを表象することを可能としている、とするのである。p.113.

24) 海老島均「GAA クラブ史を通して見た民族アイデンティティの形成過程」『エール』第24号、2004年、66頁。

25) ゲーリック・リヴァイバル運動におけるアングロ・アイリッシュの作家たちの存在は重要な位置を占めている。小田、66頁。

26) Bairner, p.71. 16世紀末にアイルランド支配を目的に設立されたトリニティ大学は、19世紀半ばにユニバーシティ・カレッジ・ダブリンの前身がカトリックの大学として出来るまで、唯一の大学であった。

27) クローク大司教のキューザックに宛てた手紙、The GAA. その他創設時のパトロンで有名なのは、土地同盟のリーダー Michel Davitt, と前述の C.S. Parnell である。彼らはGAAの創設にはクローク教ほどコミットしなかったとされる。土地同盟とGAAの関連については、海老島が詳しく述べている。しかし地域レベルでは、コミュニティを形成する重要な組織として深く関連していたと思われる。1922 - 32年に関するブラウンの次の記述。「ハーリング(ひじょうに古い伝統を持つ)やフットボール(ケリィで古くからおこなわれていた)といったスポーツは、ナショナルリストの大儀を指示するものに数えられていたため、農村世界が大規模な全国組織や政治運動と接触する機会を増やしていくこととなった」(98頁)。

28) Sugden/Bairner, p.27. 海老島均「スポーツ組織活動参与とナショナリズムの生成過程 - イギリス統治下のアイルランドを例に」『スポーツ社会学研究』第12巻(2004年)。

29) GAA プレイヤーにはオリンピックのアスリートやメダリストも含まれていた。GAA は Irish Amateur Athletic Association (IAAA) と鋭く対立していたが、1922 年に新設された National Athletics and Cycling Association へと主導権を渡したとされる。IAAA は 3 年後には解散している。1925 年にはベルファストのミーティングでの賭をめぐって、北アイルランド AAA の分離を導いたが、それをめぐり、1932 年には NACA は 26 カウンティからしか構成されていないということで、IAAF からはずされ、アスリートたちは国際競技大会に参加できなかった。GAA 博物館の展示より。

30) アイルランドの伝説的英雄クーフリンと関連のあるハーリングが神話的に取り上げられるのも、このことと関連していると思われる。次の入門的な小冊子では BC1272 に最初のハーリングに似たゲームの記述が古代ゲーリックの年誌にあるとしている。I. Prior, *The History of Gaelic Games*, Appletree Press, 1997.

31) A. ガットマン『スポーツと帝国主義』昭和堂、1997 年、215 頁。

32) キレーン、前掲書、199 頁。

33) 海老島『エール』75 頁。

34) 松尾はそこにみられる人間関係の濃厚さと GAA の指導者への愛着について述べている。172 頁。

35) 竹下英二「民族エートスと音楽 アイルランド文化精神を支えているアイルランド語『デューハス dachas』をめぐって」『エール』19 号、1999 年。

36) ダンスにおいても、かつては「ダンシング・マスター」という各地を旅しながらダンスを教えたり、独自の技術を披露したりするいわゆる「師匠」がいたが、競技的側面の強い「アイリッシュ・ダンス」が「伝統」として確立されるにつれ、それらのマスターはみられなくなった。そこでは、GAA と同様に、ダンスとナショナリズムとの密接な関係がみられる。山下/山本、前掲書。

37) 竹下、64 頁。

38) 竹下、63 頁。

39) 竹下、同上書。S. ヒーニー『プリオキュペイションズ 散文撰集 1968 - 1978』国文社、2000 年。239 頁。

40) 「インターナショナルゲーム」としてのゲーリックスポーツは、国内ではオールアイルランドチャンピオンシップと比較すると、それほど人気ではないが、世界 7000 万人といわれるアイルランド系移民を背景に、各国に GAA クラブがある。GAA ホームページ参照。

41) Cronin, p.113.

42) 「フットボールとハーリングのオールアイルランドのファイナルは、われわれの文化において秋の定義である。すなわち一族の集まりであり、メーヨー (Mayo) [アイルランド西部のカウンティ] では農民が、ブロンクスの労働者と、あるいはシドニーの行き場のない教師と、同じゲームを見るために席に着くような、秋の午後である」。p.70 T. Humphries, *Green Fields Gaelic Sport in Ireland*, Weidenfeld & Nicolson, London, 1996. また、今年 RTE では、フットボールのオールアイルランド決勝のラジオ中継をアフリカへも配信できるようにした。「The perfect gift for your friends or relatives in Africa!!」

(http://www.rte.ie/radio/allireland_sw.html より)

43) すでにギネス社の主要株主はアイルランド人ではないが、内外ともにもっともポピュラーな「アイリッシュネス」の表象であるといえるだろう。T. イーグルトン『とびきり

可笑しいアイルランド百科』筑摩書房、2002 年。

44) 1984 年は、GAA の 100 周年記念であり、大きなセレブレーションが行われた。他方で、この年は、ゲーリックゲームスのあり方にとっても大きな転換期となったといえる。それは、各クラブが、スポンサーによる収入を模索し始めたという点である。GAA がスポンサー名をユニフォームに入れることを受け入れるのは 1991 年になってからである。だが、GAA2005 年度の報告書によれば、スポンサー収入を含めた商業的歳入は 23% であり、収入源の 70% は入場券料である。そのほとんどがオールアイルランドシリーズで得られている。また、メディアによる収入は、スポンサー収入を上回る。2004 年の入場料収入：€24,189,533、メディア：€5,319,856、スポンサー：€1,984,541

(http://www.gaa.ie/page/official_reports.html)

45) 以下、GAA 博物館のホームページより。

This interesting new venue offers the flexibility to suit receptions for 10 to 2,500 people, private dining, product launches, seminars, conferences, exhibitions, training courses, meetings, set-design and almost any event imaginable. The venue is highly versatile offering a wide range of large capacity conference rooms, smaller more intimate suites and 85 individual meeting rooms along with large indoor and outdoor concourses.

さらに、2005 年秋には近接してホテルが開業するなど、クローク・パーク周辺の商業施設化、ビジネスパーク化が進められている。

46) プレイヤーへの給料 (休業補償) についての議論が、GAA においても持ち上がっている。GAA は選手会とのこれについての議論を全面的に拒否している。他方で、アイリッシュインデペンデント紙は GAA が支払いの準備を進めていると報じた。Irish Independent 16, July, 2005.

47) 2005 年の OECD の調査によれば、1991 ~ 2003 年のアイルランドの GDP 成長率は、EU 加盟国で最も高く、6.7%。ちなみに日本は 1.3%。

48) 大飢饉時の人口は約 800 万。現在 400 万弱。

49) 1990 年の教会へいく率は、ヨーロッパの主要なカソリック国の中でもアイルランドは飛び抜けている。少なくとも週に一回いく率では 81%、北アイルランドが二位で 49%、次いでイタリアで 40%。

Religion and Politics, T. Inglis (eds), University College Dublin Press, 2000, p.19.

50) 北アイルランド問題の平和過程の進展も重要なファクターであろう。R. カーニー「主権を超えて 聖金曜日合意以後の愛英関係」日本記号学編『ナショナリズム/グローバリゼーション』記号学研究 19、1999 年。H. Tovey/P. Share, *A Sociology of Ireland*, Gill & Macmillan, 2003 (2nd edition).